

恩師、安積75期生、同窓生へ 発行部数 三百十部、老後の生き方を真剣に問い掛ける豆新聞 住所変更をう連絡。

七五期

葉書きの同級会

▼11月6日未明柳沼弥重恩師が亡くなった。私は訃報を聞いて自宅を訪問した。

遺体には紫魂会（応援団OB会）から喜寿の祝いに贈られた紫の旗が被せられていた。6年間の自宅療養生活で最後に私が会ったのは一連の安積高の版画の印刷物をいただいた今年の春だった。▼葬儀は星薫64期を『柳沼弥重先生を送る会』の代表として僧侶も神主も入らず名木昭66期の司会で

進行。約三百五十人が参列した。安積高校応援団と共に全員校歌の斉唱の後、同級生としての高橋健郎46期を初め7人の教え子が今は亡き師に語りかけた。異口同音に口にしたのは生徒と同じ目線で考え対等な立場で接する生徒達の餓鬼大将の姿だった。皆の挨拶を受け一人娘悦子さんは『父が皆さんの心の中に生き続ける事が嬉しい』といった。▼教師としての彼が生徒に教えた事は通常学校で教える知識などでは無く、辛口の人間としての生き方で有る。それに惹かれた、多く

の教え子は柳沼宅を出入りし師弟の関係は卒業後も続いたのである。なかでも私は先生からも奥様からも鈴木木庄平66期初代応援団長が『そうへいちゃん』と呼ばれる事が羨ましかった。▼思えば昭和34年安積に入学した4月、私たち新入生は放課後、体操場に集められ応援団の指導の元、応援歌を覚えさせられた。応援団員に囲まれた私たちは狼に囲まれた子羊であった。そこにやって来た一人の教師が『お前ら、憧れの安積高校に入学したかったら、応援歌の一つくらい覚えてこ

い』と吠えた。新入生には怖い狼の群れのそのボスが『野獣』だったのである。▼故人は献体を申し出た。校歌と応援歌が次々と歌われる中を『紫の旗をかけた棺』は応援団OBによつて運ばれ霊柩車に乗せられた。会葬者全員の見送りうけ、安積高正面門前に一旦停車後、福医大に向かった。こうして安積の名物教師が一人あの世に去った。▼谷代正毅⑥日本興業銀行11月14日青木義孝恩師福島大学の招きで学生を前に講義を行う。帰途、郡山下車。味の会にて会合予定。

無責任編集発行 郡山市熱海町熱海4の 村田英男 FAX0249-84-2131 求む、近況報告